

## 1. 前回確認

※『方便品』を押さえないと迹門の重要性が理解出来ない。

1. 『方便品』のテーマは「一仏乗」を開顕すること。一切衆生の成仏。  
文上は舍利弗の成仏。文底は一切衆生の成仏の開顕。

2. 仏出現の目的は？

78頁－43、44

・仏出世の一大事の因縁「四仏知見」。一切衆生に対して仏知見を「開・示・悟・入」すること。

79頁－45

・②－43、44を詳説。最重要箇所である。「仏知見」の中身は「声聞、縁覚、菩薩を含め一切衆生は悉く皆ぼさつ」である。それは「唯仏与仏」と語られる如く、仏のみぞ知るところであって衆生には決してわからないこと。

79頁②－46「余乗の二、もしは三あることなし」

声聞、縁覚の二乗、菩薩を加えた三乗。どれ一つも分け隔てなし。一切が「ぼさつ」と呼ばれる存在。それを一仏乗と呼んで、総てを一つの車に乗せる。その真理を衆生に示し悟らせる。それが仏出世の一大目的ということ。

↓  
すべて「ぼさつ」を教化するのが目的

3. では一仏乗で明かす「ぼさつ」とは誰か？

・声聞、縁覚、菩薩の三乗を含む九界の衆生  
(あえて「ぼさつ」と標記するのは三乗中の菩薩乗と区別するため)

・二乗を菩薩にし、菩薩を仏にするのではない。

・二乗は二乗の姿のまま、菩薩は菩薩の姿のまま仏であることを示すのが一仏乗。

・背景には小乗の二乗は阿羅漢位を最高位とし自らの解脱のみを求め、二度と人間界に生まれ出てこない。出家至上主義者。

大衆への働きかけがない。

一方、大乘は小乗の出家至上主義に反発し、「誰でも仏教」を目指し大衆への布教を行ったが、唯一例外を設けたのが小乗の出家者。

彼らを不成仏者と排斥した。この矛盾と対立を解決する為に登場したのが法華経である。そこで、二乗には目を外に向けさせる。そして阿羅漢位に止まるのではない。「あなたも仏になれる」。成仏は釈尊一人のみに限るものではない。

菩薩には例外を設けさせない。一つの例外なく一切衆生が仏になれる道を提示した。

そこから生まれた教えが「一仏乗」である。

その「一仏乗」の立場から導き出される教えが「一切衆生皆悉ぼさつ」という仏知見の中味である。

4. では「ぼさつ」とはどのような存在か？

・成仏確定者のこと。

5. 「成仏確定者」とは何か？

・成仏確定者は成仏者ではない。絶対条件は「ぼさつ行」の実践である。

・仏（仏知見）のみぞ知る「一切衆生皆悉ぼさつ」を明かす唯一の教えである「法華経」を信じ、唱え、他にも説く。これを「ぼさつ行」という。

その「ぼさつ行」の弛まぬ実践が「成仏行」である。

その「成仏行」を間断なく励む姿が我等の成仏の姿である。

故に「成仏確定者」といえる。三十二相、八十種好の姿になることが成仏ではない。

それを「信受」することが一大事の因縁。

その為に仏が出現された。

5. キーワード「五仏道同」と「三世諸仏説法の儀式」

・「五仏」とは一切諸仏、過去仏、未来仏、現在仏、釈迦仏

・「三世の諸仏」とは過去仏、現在仏、未来仏

・「五仏道同」五仏の目的は総て「一仏乗」説き明かすこと。

・ 該当箇所が 78 頁② - 43 ~ 80 頁② - 51  
78 頁② - 43 ~ 79 頁② - 46 「諸仏章（総括章）」  
79 頁② - 47 「過去仏章」  
79 頁② - 48 「未来仏章」  
80 頁② - 49、50 「現在章」  
80 頁② - 51 「釈迦仏章」

・「三世諸仏説法の儀式」三世の仏は総て同じ順序で法を説く。

1. 過去、現在、未来の三世に出られた仏は総て同じ順序で法を説かれる。

まず小乗教を説き、次に権大乘教を説き、最後に実大乘教を説く。この順序は不変。

仏教史に即した事実である。

それは永遠の過去から永遠の未来に繰り返されるものであり、仏と呼ばれる方は総てこの順序次第で法を説かれる。この教説のねらいは法華経が真理の法であることを証明する為。

該当箇所が 82 頁② - 59 ~ 93 頁② - 105  
82 頁② - 59 ~ 86 頁② - 74 「諸仏（総括）の教化活動」  
86 頁② - 75 ~ 88 頁② - 86 「過去仏の教化活動」  
89 頁② - 88 ~ 89 頁② - 90 「未来仏の教化活動」  
89 頁② - 91 ~ 90 頁② - 93 「現在仏の教化活動」  
90 頁② - 94 ~ 93 頁② - 105 「釈迦仏の教化活動」

6. 93 頁② - 104 「正直捨方便」の読み方

「正直経を説く、方便経を捨てて」

7. 日蓮仏教からの知見

・「一切衆生皆悉ぼさつ」の原理は『開目抄』「九界も無始の仏界に具し、仏界も無始の仏界に具わりて」（『開目抄』平 216）

「所化以て同体」（『観心本尊抄』）

十界互具の原理から。三乗がぼさつなら他界の衆生もぼさつが成り立つ

・「ぼさつ行」とは

「釈尊の因行果徳の二法は〜」（『観心本尊抄』）

因行がぼさつ行。果徳は成仏すること。成仏とは悟りを得ること。悟りの内容は仏知見。

その中味は「一切衆生皆悉ぼさつ」

・「成仏」とは

「成仏確定者」である末法の衆生を成仏者にする手段は不断の五字七字の題目信受。

その姿こそが成仏の姿。

・「三世諸仏説法の儀式」

法華経の真実性を証明する上で重視された教説。

『寺泊御書』平 187 頁

「法華経は三世説法の儀式なり。過去の不軽品は今の勸持品。今の勸持品は過去の不軽品なり。今の勸持品は未来、不軽品たるべし。その時は日蓮はすなわち不軽菩薩たるべし」

『太田左衛門尉御返事』定 1497 頁

三世の諸仏の説法の儀式の大要也。教主釈尊寿量品の一念三千の法門を証得し給事は三世の諸仏と内証等きが故也。但し此法門は非釈尊一仏己証諸仏亦然也。我等衆生の無始已来六道生死の浪に沈没せしが、今教主釈尊の所説の法華経に奉値事は乃往過去に此寿量品の久遠実成の一念三千を聴聞せし故也。難有法門也

## 2. 本日拝読箇所

譬喩品の最重要ポイント

95頁③-3

・「是我等が咎なり、世尊にはあらず」 舍利弗の気付き

95頁③-4～6

・舍利弗の悟り

96頁③-10

・「我等も亦仏子にして 同じく無漏の法に入れども 未来に無上道を演説すること能わず」悟りの法を聞く声聞から、それを聞かせる声聞になっていなかった。ぼさつ行を行っていないかった。

99頁③-23、24

・「汝今悉忘」「憶念」 久遠教化の密示

99頁③-25

・舍利弗への授記。

※「授記」については資料参照。

未来成仏の保証。もし不当たり手形だったらどうする。そんな確証がないことに勇躍歓喜できるだろうか。

文上は未来成仏であるが文底はこの時点で成仏している。

なぜなら、ぼさつ行の実践、それ自体が成仏行であると悟った。

104頁③-43・44

「世尊、我れ今疑悔無し～千二百の心自在なる者～未だ聞かざる所を聞いて皆疑惑に墮せり。善哉世尊願わくは四衆の為にその因縁を説いて」

### 「三車火宅喩」理解のポイント

1. 内容の不自然さ

・何故父親は火宅に飛び込んで子どもを助け出さなかったのか。保護責任者遺棄罪。

2. 不自然な描写の裏に込められた真実とは

・舍利弗の悟りと懺悔を釈尊が舍利弗に替わって語る

105頁③-46～

・三車火宅喩は舍利弗の悟りと同時に懺悔談。それを釈尊が舍利弗に替わって説く。

106頁③-48

・我よく此所焼くの門より安穩に出ることを得たりといえども、しかも諸子等、火宅の内において嬉戯に樂著して、覺えず知らず、驚かず怖じず。火来たって身を逼め、苦痛己を切むれど、心厭う患せず、出でんと求むる意無し」

107頁③-50、51、52

・「亦復何者かこれ火、何者かこれ舎」

当に顛倒の状態

108頁③-53

・「時に諸子等、おのおの父に白して言さく～願わくは賜与したまえ」

一言くらいお礼を言うべきであろう。これぞ顛倒の極み。危機にあったことも知らない。この裏には舍利弗の深い深い懺悔あり。「なんと脳天気」「なんと愚かだったのでしょか」

3. 法華経は懺悔の経。

・「三車火宅喩」、「長者窮子喩」在世仏弟子の懺悔談

「良医治子喩」滅後の衆生の懺悔談

・根底は寿量品で明かされた仏の大慈悲 「見守る心」「信じて待つ心」